

《翻訳》

エツサ・デ・ケイロース著『マイア家の人々』（3）

―第3章―

尾 河 直 哉

第三章

しかし一年が過ぎ、さらに数年が過ぎた。

復活祭数日前の四月のある朝、ヴィラサはふたたびサンタ・オラーヴィアにやってきた。

サンタ・オラーヴィアではヴィラサがこんなに早くやってくるとは思ってもいなかった。しかもその日は、雨の多かったその春初めての好天で、旦那たちはみな農園に出て散歩をしていた。髪に白いものが混じった執事のテイシェイラは、頻繁に手紙のやりとりをしている一家の管理人の姿を眼の前にしてすっかり嬉しくなり、食堂に案内した。食堂では年老いた家政婦のゲルトルーデスがびっくりして重ねた食卓用ナプキンを落とし、ヴィラサの首に飛びついた。

窓のある三つのドアが、一面に陽の射すテラスに向かって開け放たれ、

その大理石の手すりは蔓植物で覆われていた。庭へ出る階段に向ってヴィラサが歩みを進めると、孫を抱えて、柘榴の生えた道をこちらにやってくるアフォンソ・ダ・マイアの姿がかるうじて見えた。たくわえた髭は真っ白だが、がっしりした体躯の赤ら顔である。山高帽をかぶり、フラシ天のマフラーで顔を包んだ見知らぬ男性を遠目に捉えたカルロスは、走ってきて興味深げに男を眺めていたが、善良なヴィラサの腕に抱きあげられた。ヴィラサは日傘を置くと、カルロスの頭と顔に接吻すると口ごもりながら言った。

「ああ！ 坊ちゃん、大好きな坊ちゃん！ なんてかわいくていらっしやる！ こんなに大きくなつて…」

「来るならなぜ前もって言ってくれなかったんだ、ヴィラサ？」と腕を広げて近づきながら大声で言った。「来週だとばかり思ってたものだから！」

ふたりの老人は抱き合った。潤んで生き生きとした眼差しが一瞬交わると、感動も新たにふたりはふたたび抱き合った。

すらっとした体躯のカルロスは、白いフランネルのゆつたりとした半ズボンのポケットに両手を突っ込み、美しくカールした黒髪のうえに同じフランネルの帽子をはすにかぶって、相変わずまじめな顔つきでヴィラサをじっと見つめている。そのヴィラサは、唇をふるわせながら手袋を取ると、それで眼鏡の下の眼を拭いていた。

「だもんで、来るなんてだれひとり考えておらんかった。あそこの川にいた家のものも」とアフォンソは言った。「まあいい。とにかく来てくれたんだから…それにしても、ヴィラサ、あんた、元氣そうだなあ！」

「旦那さまもお元氣そうで！」嗚咽を抑え、口ごもりながら代理人は言った。「お肌には皺ひとつなくて…髪はたしかに真っ白ですが、お顔は青年のようで…お見それ申し上げそうでした！…前回お目にかかったときのことを思い出すと…それにしても、坊ちゃんの花のようにお美しい！」

ヴァラサはカルロスをもういちど抱き上げようしたが、少年はけけらと笑いながらベランダから跳び下り、木のあいだに吊った空中ブランコに乗ってリズムをつけ、力強く優雅に漕ぎながら叫んだ。「あんたがヴィラサー！」

ヴィラサは日傘を腕にひっかけ、カルロスの姿に見とれていた。

「すてきなお子さんで！ うつとりしてしまいます！ お父さまにそっくりですなあ。とくに眼なんか、あれはマイア家の眼ですね。髪の毛がカールしているところも…でもきつと男らしくなれますよ！」

「健康で丈夫な子だ」と老人は髭を撫でながら嬉しそうに言った。「ところで、おたくの息子さんはどうしてる？ マヌエルは。結婚はい

つ？ さ、ヴィラサ、中へ入ろう。話すこともたくさんあるし…」

ふたりは食堂に入った。アズレージョを貼った暖炉に薪が燃えていたが、その明かりは淡く拡がった四月の陽の光におされて弱まっていた。陶器や銀器が紫檀の食器棚で煌めいている。カナリアは嬉しくて頭がおかしくなっているようだった。

様子うかがっていたゲルトルーデスは、白いエプロンの上で腕を組んだまま近くにやってくると、親しげに優しく言った。

「この恩知らずなお方がサンタ・オラーヴィアにまたいらつしやつたとなると、旦那さまとしてもたいへん嬉しゅうございますね！」

そして、早くも白い頬髭をうつすら生やした年老いた月のように白く丸い顔を、共感の光で煌めかせながらゲルトルーデスは言い足した。

「ええ、ヴィラサの旦那さま、もう以前とは違うんでございますよ！ カナリアまで歌っているんですから！ わたしもまだ歌えるなら歌うところなんです…」

ゲルトルーデスはふと胸にこみ上げるものがあつて堪えきれなくなり、思ふ存分泣くために退室した。

テイシエイラは黙って上品な微笑みを浮かべながら待機していた。その微笑みは、執事の立ち襟の狭間に広がってゆく。

「ヴィラサさんには青い部屋をご用意してさしあげたらどうかね？」とアフォンソは言った。「子爵夫人になったあの人が泊っていた部屋だよ…」

そこでヴィラサはすかさず子爵夫人について尋ねた。

子爵夫人はルナ家の家人で、妻の従妹なんだが、とアフォンソは話し始めた。この女性をカミーニャの詩人たちが詩に謳っていたころ、出自の怪しげなガリシアの下級貴族、ウリーゴ・ド・シエーラ子爵と結婚したんだ。ところがこの男ときたらとんだ呑んだくれの暴力夫でね、妻を

段つてばかりいた。その後未亡人になって文無しになった子爵夫人を、親族の義務つてもものもあるし、サンタ・オラーヴィアにご婦人が欲しかったこともあって、受け入れたというわけだ。

子爵夫人は最近体調を崩してしまつて…と、ここで時計を見ると、アフォンソは子爵夫人の体調不良話を中断した。

「ヴィラサ、急いで用意してくれ。もうすぐ夕食になる」

マイア家の管理者も驚いて時計をに目をやり、それから用意が出来た食卓と六セットのテーブルウェア、フラワーバスケット、ポルト酒のボトルを見た。

「すると今じゃあ午前中に夕食をお取りになるんですか？ てっきり昼食かと…」

「こういうことなんだ。カルロスには食餌療法が必要だね。早朝にはもう農園にいるから、昼食は七時に食べる。すると夕食は一時。というわけで、子どもの面倒を見なければならぬわたしとしても結局…」

「アフォンソ・ダ・マイアさん」ヴィラサは抗議の声を上げた。「そのお歳で生活習慣を変えるなんて！ おじいちゃんになるためには仕方ないでしょうが！」

「ばかな！ 違うんだ…こつちの方が調子いいんだよ。いや、ほんとに！ さあ急いでくれ、ヴィラサ。カルロスは待たされるのが嫌いだ…：教区司祭がいらっしゃるかもしれないし」

「クストーディオ神父が？ そりゃいい！ それじゃひとつお言葉に甘えて…」

廊下に出るとすぐに、マイア家の管理人と話してくうずうずしていた執事が、日傘と肩掛けマントを受け取りながらヴィラサに尋ねた。

「率直におっしゃってください。農園付きの別荘としてここはいかがでしょうか？ ヴィラサさん」

「気に入りましたよ、テイシェイラさん、気に入りました。サンタ・オラーヴィアには楽しみのためだけに来てもいい」

そして手を召使いの肩に親しげに置くと、まだ濡れた眼でウィンクした。

「ここではすべてがお坊ちゃんを中心に回っています。お坊ちゃんがいらっしゃるおかげで、ご主人さまも生き返りました！」

テイシェイラは恭しく笑った。子どもはまぎれもなく家の喜びなのだ：

「おや？ あの音はなんですか？」階段の途中で立ち止まり、上から聞こえてくる、バイオリンの調音の噓ぶような音に耳を傾けた。

「お坊ちゃんの家庭教師のイギリス人、ブラウンさんですよ。たいへんお上手で、素晴らしい音色です。ときには夜に広間でお弾きになるんですが、そのときには、地方裁判所の判事さんが手風琴で伴奏なさつて…さ、ここです。こちらがヴィラサさんのお部屋になります…」

「いいですなあ、いや、ほんとに…」

まだ新しい家具のニスが、二枚の窓から射し込む陽光に照り映えてきらきらと輝き、床には小さな青い花をあしらった明るいグレーの絨毯が敷かれています。窓の両側にたくし上げて留められた飾りカーテンも、戸口に吊るした緞帳も、地の厚い平織りの綿布で、明るい背景に青みがかった同じ花葉模様を繰り返している。この瑞々しい田舎風の快適さに、素直なヴィラサはつい嬉しくなった。

部屋に入るとすぐにクレトン生地にさわり、整理ダンスの大理石をこすり、椅子がしっかりとしているかどうか確かめた。ポルトで買った家具だろうか？ それにしても洗練されているぞ。でも、そんなに高くはないはずだ。テイシェイラにはぜったいわからないだろうが！ 爪先立ちになって二枚のイギリスの水彩画に見入った。ロマン派風の廃墟に守ら

れて芝生に横たわる牛が描かれている。ティシエイラは時計を手にヴィラサのようすを見守っていた。

「旦那さま、あと十分しかございません：お坊ちゃんはお待ちになるのがお嫌いなんです」

そこでヴィラサは意を決してマフラーを取り、羊毛で編んだ重いベストを脱いだ。シャツの間からは、リユーマチのために着ている真っ赤なフランネルと、シルクに刺繍を施した肩衣カウライが覗いていた。ティシエイラは旅行鞆の革紐を緩めている。廊下の突き当たりからはバガニーニの『ヴェニスの謝肉祭』を弾くバイオリンの音が聞こえ、締め切った窓からは戸外の広さ、田野の爽やかな穏やかさ、四月の緑が手に取るように感じられるのだった。

眼鏡を外し、濡れタオルを首と耳の後ろにまわして少し震えながら言った。

「じゃあカロリーニ^①くんは待つのがお好きじゃないんですね。どうやらこの子が支配者らしいな：甘やかしすぎじゃないだろうか」

だがティシエイラは真剣な面持ちでまじめにマイア家の管理者の迷妄を解こうとした。甘やかしすぎだとおっしゃいますか、旦那さま。あの坊ちゃんは、おかわいそうに、鉄の棒で教育されていらつしやるんですよ。おほつちやまがご自身でヴィラサさまにお話できたなら！ ランプの明かりもつけずたったひとりで部屋にお眠りになっている五歳児なんかほかにおりません。毎朝、たらいの冷水にばしゃつと放り込まれて。外が凍えそうな日もあるっていうのに：ひどいことはこれ以外にもまだまだ。もしお孫さんになりたいする熱烈な愛情が感じられなかつたら、殺したがつているとお考えませんか。こんなことまで考えてしまうわたしを、神さま、どうかお許しください：でもこれって、どうやらイギリス式の教育法らしいんです！ 好き勝手に走らせ、転ばせ、木登りをさせ、び

しょ濡れにさせ、日光浴までさせるんですから。まるで百姓の子ですよ！ それに食事も厳しくて！ 食べる時間と物が決まっています：お坊ちゃんは、おかわいそうに、眠ひんむいて口に唾溜めていることもあるんです！ あれはおつらいでしょうね。ほんとうに」

ティシエイラは加えて言った。

「結局、神のご意思だったのでしよう。お坊ちゃんはお強くなったわけですから。でもあんな教育、わたしたちは賛成しておりませんよ。わたしもゲルトルーデスも」

黒いリボンで白いベストに結びつけた時計をもういちど見て、ティシエイラはゆつくりとした足取りで数歩部屋のなかに入ると、ベッドの上に置かれた管理人のフロックコートを取り上げ、襟に軽くブラシをかけて細かな心遣いを示しながら、禿げた頭に残ったふた房の髪を化粧台の近くで撫でつけているヴィラサに言った。

「やって来て早々、イギリス人の家庭教師がお坊ちゃんになにを教えたかご存じですか？ ポート漕ぎ、ポート漕ぎですよ、ヴィラサさま。渡し守みたい！ あの空中ブランコや道化の軽業みたいなことについてはずもがな。話したくありません。ブラウンさんが良い人だということとは、そりや喜んで認めますよ。寡黙で、清潔で、音楽に秀でていらつしやつて。でも、いつもゲルトルーデスに申しておるんですが、イギリス人にはどんなに良くて、ポルトガルの貴族を教育するやり方じゃありませんよ。どう考えてもあれは。ドナ・アナ・シルヴェイラさまにお話になってみてください。そうすれば……」

ドアをそつと叩く音があつた。ティシエイラは黙った。召使いがひとり入ってきて、執事に合図をし、フロックコートを恭しく腕に掛けると、言うことをきかない髪の毛を相手にヴィラサがいらいらしながら真っ赤な顔でいつまでも闘っている化粧台のそばに立った。

テイシエイラは扉のところへ、時計を手を言った。

「夕食です。ヴィラサさま、あと二分です」

管理人もすぐに部屋を出た。階段を降りながらもまだボタンをかけている。

全員もう食堂に揃っていた。薪が燃え尽きて白い灰になった暖炉のそばではブラウン氏が『タイムズ』をめくっている。カルロスは祖父の膝に乗って友だちのこと、喧嘩のことについて長々と話していた。ふたりのそばでは善良なクストーディオ教区司祭が、嗅ぎタバコをのせたハンカチを手にもしていることも忘れて、口をあけ、父親のような優しい笑みを浮かべてその話を聞いている。

「さて、こちらはどなたでしょうか、司祭さま」とアフォンソが言った。

「これはこれは！ ヴィラサくんじゃないか！ おいでだなんてだれも言ってくれなかったものだから！ さあさ、この老骨のそばに！」

カルロスは、ふたりの老人が顔をくっつけて長いあいだ抱擁している姿がおもしろくて祖父の膝の上で飛び跳ねた。ひとりは禿げ頭に残った髪を房をびたつと撫でつけ、もうひとりには白髪を密林のまんなか王冠状の禿げがぼっかり口を開けている。そして、手に手を取ってじつと見つめ合い、ここ何年かで増えた皺をお互いに点検しあっていると、アフォンソが言った。

「ヴィラサ！ 伯爵夫人だ！」

ところが、管理人が眼を見開いて部屋中探しても伯爵夫人の姿は見当たらない。カルロスが手を叩いて笑った。ヴィラサは伯爵夫人の姿を部屋の片隅の、食器棚と窓のあいだに発見した。黒い服を着て背の低い椅子に座り、肉付きの良い腕を肥満した腰に置いている。よく太ってふつくらとした紙のように白い顔と何層にも折り畳まれた首の皺が、恥ずか

しさをたちまち赤くした。ヴィラサにかける言葉が見つからないまま伯爵夫人はふつくらとして蒼白い手を伸ばしたが、その指の一本は黒い絹に包まれていた。それからスパンコールをちりばめた大きな扇子を煽ぎ、無理でもして疲れたかのように、息を切らして胸を大きく上下させた。

召使いがふたり、スーブの給仕を始めた。テイシエイラはアフォンソの椅子の高い背もたれの背後にじつと立っている。

しかしカルロスは、祖父の膝のうえにまたがったまま、話を最後までしたがった。マヌエルだよ、手に石をもったの：あいつ最初、仲直りしたがってただけど、ほかのふたりが笑い出したんだ。そしたら、みんなにつつかかってきてさ……

「みんなおまえより大きかったのか？」

「三人ともでかいんだよ、おじいちゃん。ペドラおばさんにきいてもいいよ：おばさん、脱穀場に見てたんだから。ひとりなんか鎌もつてた……」

「よしわかったわかった。事情は了解だ：さあ降りて。スーブが冷めちゃうぞ。せーの、ほれっ！」

老人は、テーブルの上座に座るのが嬉しくてしかたない家父長のきさらするような笑顔で言った。

「どんどん重くなるなあ。もう膝に乗せられないよ」

だがここでアフォンソはブラウン氏に目を遣ると、ふたたび立ち上がり、管理人に紹介した。

「ブラウンさん、こちら友人のヴィラサさん：申し訳ない、ついすっかりしておりまして。テーブルの端っこに座っているあの紳士、無敵のドン・カルロス先生のせいです！」

家庭教師はボタンを上までぴちつとかけた軍隊式の長いフロックコート

姿で、背筋を伸ばし、硬直した姿勢のまま食卓をぐるっとひとまわりしてやってくる、特大の握手でヴィラサを揺すった。それからひと言も発することなく元の場所に^{シェイク・ハズ}戻り、食卓用ナプキンを広げてその見事な髭を撫で、今度は強い英語訛りでヴィラサにこう言った。

「とっても良い天気ですね…晴れ晴れとして！」

「晴朗な日ですね」ヴィラサは、アスリートのような体つきの男に気おくれしてしながらも挨拶かたがた答えた。

その日は自然とリスボンの新聞のこと、郵便馬車のこと、じき開通する鉄道のことが話題になった。ヴィラサはすでにカレガードまで鉄道で来たのである^②。

「どうです、怖くは？」口へ持つて行こうとしたスプーンを止めたまま教区司祭が訊いた…

この見上げた男はレゼンデ^③からいちども出たことがなかった。薄暗い聖具室と教区司祭の住居に付随する農地の外の世界に、バベルの塔のような恐怖を感じているのだった。とりわけ、あれほど噂になっている鉄道のたいしては…

「たしかにいささかぞっといたしました」体験済みのヴィラサは断言した。「だれがなんと言おうと、あれにはぞっといたします！」

しかし教区司祭がおびえていたのは、なによりも、この機械が引き起こすにちがいない不幸な事故だった！

ヴィラサはそこで郵便馬車の不幸な事故のことを思い出した。アルコバサで郵便馬車がひっくりかえり、シスターがふたりひかれたのである！ どのみち危険はつきものだ。部屋の中を歩いていたら脚を折ることがあるのだから…

教区司祭は進歩を愛していた。必要だとさえ思っていた。だが、すべてをあまりに性急にやろうとしているように思える。国はこうした発明

品を受け入れる用意ができていない。必要なのはちゃんと走れる道だ…

「それに経済も！」香辛料を引き寄せながらヴィラサが言った。

「ブセラス産のワインはいかがでしたでしょうか？」と召使いが肩越しにつぶやいた。

グラスがいっぱいになると、管理人はグラスを持ち上げ、光に透かし、その豊かな色を楽しむと、唇の先で試飲し、アフオンソに目配せした。

「われわれに乾杯！」

「老人に！」とアフオンソは言った。「ブラウンに訊いてくれ…なあブラウン。いい酒だろうか？」

「素晴らしい！」家庭教師は大きな声で力強く答えた。

するとカルロスが食卓の上で手を伸ばしてブセラス産ワインを要求した。ヴィラサが到着したことをお祝いする、というのがその理由である。

祖父は同意しなかった。孫に許されたのは、いつものように、小さなグラスでコラレス産のワインを、それもたった一杯だけ。孫は首から垂らした食卓用ナプキンの上で腕組みした。あまりの不当に驚いているといった素振りである！ ヴィラサの来訪をお祝いするというのに、ブセラスの一口くらいなぜ許してもらえないの？ ゲルトルーデスは言ったじゃない。管理人のヴァアラサさんがいらつしゃったら、その晩のティーパーティーにはベルベットの新しい服を着るって。それなのにお祝いの食事じゃないとか、ブセラスはだめだとか…どうしてなの？

それまで嬉しそうに孫の言葉にじつと耳を傾けていた祖父は、突然厳しい顔になった。

「貴殿は少しおしゃべりが過ぎるようですな。食卓でおしゃべりが許されているのは大人だけです！」

カルロスはすぐに顔を伏せて皿を見つめると、おとなしくつぶやいた。「わかったよ、おじいちゃん。機嫌直して。大人になるまで待つか

ら……」

食卓のまわりに微笑みが広がった。伯爵夫人も嬉しがってゆつくりと扇子を煽いでいる。教区司祭はうつとりとしたその善良そうな顔を少年に向け、毛深い手を開いて胸に押し付けた。こうしたことがおもしろくて仕方ないのだ。アフォンソは髭でもきれいにするのかのように直卓用ナプキンで口を覆って咳をした。笑いと、眼に輝く感嘆を気取られないようにするためである。

カルロスの利発さにはヴィラサも驚いた。少年の話をもっと聞きたくなり、ナイフ、フォークを置くと訊いた。

「どうだいカルリーニョス、お勉強は進んでいるかい？」

少年はヴィラサを見もせず、そっくり返ったままフランネルのウェストバンドに指をひっかけ、鼻高々で返事をした。

「お馬にもう『ブリージダ』式横跳びさせられるよ」

これには祖父も堪えきれずに、椅子の背に斃れかかって笑いだした。

「うまいんだよこれが！ は、は！ もう『ブリージダ』横跳びができるんだから！ ヴィラサ、ほんとうに。もう横跳びができるんだよ……ブラウンさんに訊いてみてくれ。そうだよな？ ブラウン。あの雌駒はおデブさんだけど賢いからな……」

「おじいちゃん」とカルロスは叫んだ。「ヴィラサに話してよ。ほく、ドッグカートだって操縦できるよね？」

アフォンソは厳しい顔にもどった。

「できないとは言わん……やって良いと言えば、たぶんできるだろう。だが、自分の手柄を鼻にかけないようによく頼むぞ。立派な騎士は謙虚でなきゃいかんからな……なにより、そんなふうに手を腹のところにに入れてちゃだめだ……」

しかし人の善いヴィラサは、ひとこと言おうと、指をばきばき折って

待ち構えていた。馬を決められた通りに乗りこなす能力は、どうやら最高のようですが……でもわたしがカルリーニョに訊きたかったのは、『パイドロス』^④やテイトウス・リウイウスの勉強にもう取りかかったのかということでした……

「ヴィラサ、ヴィラサ」教区司祭が警告のために割り込んだ。フォークを空中に浮かせたまま、聖なる意地悪の笑みを浮かべている。「ここにおわしますわれらの気高き友垣にラテン語で話しかけてはなりません……お受け入れになりますまい。古すぎるとお思いになっていらっしゃる……たしかに、じつに古臭い……」

「さあさあ、司祭さま、フリカッセをお取りになってください」とアフォンソは言った。「ラテン語のことになるとからきし弱いのは知っておりますよ。ラテン語のことなんざほっといて……」

教区司祭は喜んで勧めに従った。ねつとりとしたソースのなかから美味しそうな猛禽の肉を選びながらつぶやくように言った。

「まずはラテン語から始めなければ。なにはともあれラテン語……基本中の基本ですからな！」

「いやちがいます！ ラテン語はもつと後です！」ブラウンが力強い身振りで、声を大にして言った。「まずは体力だ！ 体力！ 筋力……」

そして巨大な拳をふりふり二度繰り返し返した。

「まずは筋力、筋力！」

アフォンソはブラウンを真剣に応援した。ブラウンの言う通りだ。ラテン語なんぞ学者の贅沢だ……サビ二人の王ファビウスがどういう人物だとか、グラックスの物語や消滅した国家の出来事はどうだとか死語で子どもに教えるその一方で、我が身を濡らす雨がどんなものか、自分が食べるパンはどのようにできているのか、自分を取り巻く森羅万象がどうなっているのか、なににひとつ教えないままほっておくなんて、これこ

とほど馬鹿げた話はない…

「とはいっても古典はやはり」と、教区司教がおずおずと言う。

「古典がなんだと言うんです！ 人間がせにやならんのはまず生きることですよ。そのためには健康で強くなきゃならない。健康と体力とその習慣を涵養すること。動物的な力を増進すること。肉体的に秀でた人間にすること。まともな教育はこれに尽きます。それをまるで魂なんぞ存在しないかのようにやるんです。魂は後からやってくるものですから…贅沢なおまけですよ。大人の贅沢…」

教区司祭は恐れ入って頭を掻いた。

「そうは仰つても教養は必要でして」と司祭は言った。「ヴィラサさん、そうお考えになりませんか。アルフォンソ・ダ・マイア先生、あなたはたしかにわたしより外の世界に通じていらつしやる…それはその通りだ。でもやはり教養は…」

「子づもにとつて教養とは『Titire, tu patulae recubans…』⁽⁶⁾を暗唱することではありません」とアフォンソは言った。「事実や概念、便利なものや実用的なものを教えることであつて…」

と、そこまで言うのと、アフォンソは口をつぐみ、目を輝かせてヴィラサに目配せをした。孫がブラウンと英語で話しているのだ。話題はきつとまた腕自慢、少年たちとの喧嘩話だろう。拳を振り上げ勢い込んで話している。家庭教師は髭を捏ねながらしきりに頷いていた。そして食卓の大人たちはフォークを宙に浮かせ、後ろに立った召使たちはナプキンを腕に垂らしたまま、だれもが敬意を表し、じつと押し黙って、英語を話す男の子に見入っている。

「いやたいした才能ですなあ、じつに」と、ヴィラサは伯爵夫人の方へ体を傾けてささやいた。

この善良な貴婦人は顔を赫くしながら微笑んだ。こうして椅子に埋も

れたまま黙々と食事をしていると、いつそう肥えて見える。そして、ブセラスワインを一口飲むたびに、黒字にスパンコールをあしらった大きな扇子で気だるそうに扇ぐのだった。

テイシェイラがポルト酒を注ぐと、アフォンソはヴィラサの健康を祝して乾杯した。楽しそうにがやがやと全員の杯が持ち上げられた。カルロスが「カンパニー」と口にしかけたところで、祖父が周囲を手で制した。一瞬沈黙が訪れるとそれに満足して、少年は言った。

「おじいちゃん。ぼく、ヴィラサのことが好きだよ。ヴィラサはぼくらの仲間です」

「以前から、ずっと以前からそうなんだよ！」仲介者の役回りを演じた老人はそう言ったが、手にしたグラスをきちんと持っていられないほど気持ちが高ぶっていた。

晚餐も終わろうとしていた。窓の外では、陽の光がテラスに別れを告げ、空の深い青の下、農園が、静かな大気に包まれた穏やかな緑をどこまでも押し広げようとしている。暖炉にはすでに、白い灰が残されているだけ。花瓶のリラからは強い芳香が放たれ、そこに、かすかに檸檬香漂うクレームブリュレの匂いが混じっていた。白いチョッキを着た召使がテーブルウェアを片付けると、銀器のぶつかる音がもれ聞こえてくるのだった。紋織りの白いテーブルクロスがとちらかったデザートといかにも不釣り合いだったが、そのうえではポルト酒の金色がクリスタル製のコンポート皿のあいだできらきらと輝いている。伯爵夫人は溺れそうに息を切らしながら扇子で自分を煽いていた。クストーディオ神父はゆつくりとナプキンを巻き取ってゆく。擦り切れたスーターが肘のところででかてかに光っていた。

ここでアフォンソがやさしく微笑むと、最後の乾杯をした。

「法螺吹き大先生カルロス万歳！」

「じいじさまに！」と言って、少年はグラスを飲み干した。

黒々とした頭と雪のような白髭の老人顔がテーブルの端と端でお互いに敬意を表し合っているあいだ、ほかの人たちは、この儀式的温かさに頬を緩めていた。それから、教区司祭は爪楊枝を口にくわえたまま、食後の感謝の祈りをもぐもぐ唱えた。伯爵夫人も目を閉じ、手を組む。だが、カルロスがお祈りを無視して椅子から飛び降り、祖父の首に抱きついて、耳元でなにか囁いている姿が、信仰篤いヴィラサにはいやだった。

「あだめだ、だめだ！」と老人は言った。

だが少年は祖父をますますきつく抱きしめ、甘い口づけのような優しやさやき声でいつそう熱を込めて説得したため、老人の顔には寛大さが兆してきた。

「じゃ、お祝いの日だし」根負けした老人はそう言った。「だけど、くれぐれも気をつけるんだぞ、な……」

少年は跳び上がって手を叩き、腕を掴んでヴィラサをぐるぐると回し、それから勝手なりズムをつけて歌った。

「きてきてくれて、ありがとう……テレジーニャ、ジーニャ、ジーニャ迎えに行くよ！」

「婚約者なんですよ」食卓から立ち上がりながら祖父は言った。「あれにはもう恋人がいるんです。シルヴェイラ家のお嬢ちゃんですね……テイシェイラ、コーヒーはテラスで」

外では午後が呼んでいた。澄んで高く、雲ひとつない穏やかな青空。テラスに向かいあつて植えられたゼラニウムはもう花を開き始めている。レースのように繊細で、まだ色淡い灌木の緑は、わずかな風にも揺れているらしい。淡いすみの匂いときおり流れてきて、野の花のかすかに甘い香りと混じり合う。勢いよく吹き出す噴水は歌を歌い、背の低い柵植が両側に生えた庭の道では、遅い春のおずおずとした陽光に細かい

砂が柔らかく煌いていた。陽光は、遠く農園の緑をすっぱりと包み込み、農園は、この午睡のひとつとき、瑞々しい黄金の光のなかでうとうととまどろんでいる。

大人三人はコーヒーの出されたテーブルについていた。テラスの向かいでは、ブラウンが、タータンチェックのハンチングを脇に置き、パイプを口にくわえて、高いブランコの椅子を押してカルロスを揺らしている。ヴィラサは、すまないが部屋に戻らせてくれないかと頼んだ。運動を見ているのが苦手なのである。危なくないことは重々わかっている。でもそれがサーカスでも、宙返りや輪くぐりを見ているとめまいがしてきて、最後にはきまって胃がむかむかしてくるのだった……

「それにいささか軽率ではないかと、夕食のすぐあとで……」

「これが？　ただ揺れているだけだよ……ちよと見てごらん！」

だがヴィラサは、コーヒーカップの上に顔を伏せたままじっとしていた。

一方、教区司祭は、手に持ったコーヒーが皿にこぼれていっばいになっっていることも忘れ、口をぽかんと開いたまま見惚れている。

「ヴィラサ、ほら見てごらん、あそこを！」とアフォンソは繰り返した。「危ないことなんかないんだから！」

ヴィラサはやつとのことで振り返った。少年は、ブランコの椅子に立ったまま綱を掴み、髪を風になびかせながら、空中の高いところから大きく弧を描いてテラスの方へと降りてくる。と、今度は陽の光をめいっぱい浴びて、穏やかに上昇してゆくのだった。少年のすべてが微笑んでいた。シャツとズボンが風を受けて膨らんでいる。大きく見開かれた漆黒に輝く眼が迫ってきてはまた見えなくなるのだった。

「もう我慢できません。嫌です」とヴィラサは言った。「無謀だ！」
そこでアフォンソは手を叩いた。教区司祭が「ブラヴォー。ブラ

ヴォー」と叫ぶ。ヴィラサは拍手をしようと振り返った。だがカルロス
はもう姿を消していた。ブランコがゆっくりとその動きを止めようとし
ている。そしてブラウンは胸像の台座の上に置いた『タイムズ』を取る
と、パイプの煙に包まれて農園の方へと遠ざかって行った。

「まったく素晴らしいじゃないか、体操は！」アフォンソ・ダ・マイ
アは満ち足りた気分で見事な葉巻に火をつけ、快哉を叫んだ。

ヴィラサは、体操が胸に大きなダメージを与えるとどこかで聞いたこ
とがあった。教区司祭の方はコーヒーを吸って味わい終えると、格言に
手を加えた気の利いたフレーズを發した。

「体育は運動選手を作りますが、キリスト教徒を作るわけではござい
ません。すでに申し上げたことですが…」

「たしかにもう伺ってますよ、司祭さま、たしかに！」と、アフォン
ソは陽気に言った。「なにせ毎週仰ってますから…なあヴィラサ、わが
司祭さまは、あの子に教理問答を教える教えるとしつこいんだ。耳聾
だよ。教理問答だぞ…！」

教区司祭は嗅ぎたはこのケースを手にしたまま、絶望した表情でちら
りとアフォンソを見た。小教区には身分の高い人としてほとんどこの老人
しかいないというのに、その人が宗教に反抗的な態度をとっているの
である。司祭の悩み種のひとつがこれだった。

「たしかに教理問答と申しました。先生はそうやって馬鹿になさいま
すが…ただ、教理問答はたんなる教理問答にとどまらないとわたしは申
し上げたい。それ以上のものなのです。教理問答、教理問答としつこく
申し上げておりますのも、アフォンソ・ダ・マイアさん、それはあの子
のためです」

こうして議論が始まった。クストーディオが夕食をとるときには、
コーヒーの時間になると決まって議論になるのだった。

こんな名家の世継で、将来社会を担う責任のある見目麗しい若者が、
この年齢で教理問答の教義を知らないとは空恐ろしい。善良な司祭はこ
う考えていたので、ヴィラサにドナ・セーリア・マセドの身に起こつ
た事を話して聞かせた。裁判所の書記を夫にもつこの貞淑な女性は、農
園の門前を通りかかったおりカルリーニョの姿を目にしました。愛情ふ
かく、子ども好きだったこのご婦人はカルリーニョを呼び止め、痛悔の
祈りを唱えてごらんと云ったそうです。少年は何と答えたと思います
か？「そんなもん聞いたことないよ」です！悲しいじゃありません
か。ところがアフォンソ・ダ・マイアさんは、これを冗談と取って、
笑っていらつしやる！ヴィラサさんならおわかりになるでしょう。笑
える話かどうか。たしかにアフォンソ・ダ・マイアさんは大変に学のある
お方だ。世界中を駆けまわつてもいらつしやる。だが、ポルトにさえ
行ったことのないこの哀れな司祭にも納得できることがひとつだけあり
ます。それは、教理問答の道徳がなければ人生において幸福もお行儀も
ありえないということです。

そこでアフォンソ・ダ・マイアは陽気に答えた。

「それじゃあ、もしわしがあんたにあの子を預けたら、なにを教えて
くださるのか？他人様のポケットからお金を盗んではいけませんとか、
嘘をついちゃだめですとか、弱いものいじめはしちゃなりませんとか。
そんなことしたら神様の掟に反します。地獄行きですよとか。そんなと
ころでしょ？違いますか？」

「それだけでは…」

「そりゃそうでしょう。でもね、神様を怒らせるからといってあんた
が禁じること、あの子はとくにぜんぶ知つとりますよ。立派な紳士
がすることじゃない。正しい人間がそんなことをしたらいけない。そう
いう理由でね…」

「そうはおっしゃっても…」

「いいですか、司祭さま。ここが大事なところです。わしが望んでいるのは、あの子が徳への愛のために有徳の士であらうとし、名譽への愛のために名譽を大切にすることです。地獄の業火を恐れるあまり、あるいは、天の王国へ行きたいがためにそうするのではなくて…」

そして微笑みながら立ち上がり、こう付け加えた。

「でも司祭さま、正しい人間が本当にせにやなんのは、雨の数週間が終わり、素晴らしいこんな日がめぐってきたら、野に出て空気を吸うことですよ。ここで道徳談義に耽るのはやめて。だから、さあ、行きましょう！ ヴィラサが疲れていないなら農場をひとまわり…」

教区司祭は、時代の憎むべき不信仰を目撃し、悪魔ベルゼブブが群れから最良の羊を奪ってゆくのを目の当たりにしたときの聖人のようなため息をついたが、次いでカップに目を遣るとコーヒーの残りを美味しそうに啜った。

アフォン・ダ・マイア、ヴィラサ、教区司祭の三人が小教区をひと回りして帰ってくると、辺りはすでに暗く、部屋には明かりがついていた。ラゴアサに農園をもつ裕福なシルヴェイラ一家がすでにやってきていた。最も年嵩の独身女性のドナ・アナ・シルヴェイラは一家でいちばんの才人として通っていて、公教要理と礼儀作法にかんしてはレセンデでもちよつとした權威であった。夫に先立たれたドナ・エウジェニアは動きの鈍いただの善良な婦人だったが、その太り肉は気持ちがいほどで、肌は小麦色、まつ毛も長かった。ドナ・エウジェニアには子どもが二人いた。カルロスの「婚約者」テレジーニャは、髪の真っ黒な、痩せて活発な女の子。一人息子のエウゼビオジーニョは近隣でも噂の奇跡の子である。

まだほとんど揺籃に寝ているときから、この並外れた子は、古書とあ

らゆる知識の源泉に愛着を示していた。ハイハイしているときからすでに、楽しみは部屋の間隙の真鍮に座り、毛布に包まって、二つ折り本のページをめくることがだった。学者のように禿げた小さなお鉢が、公教要理の大きな太い文字の上に屈みこむ。長じてからは、椅子に座って足をぶらぶらさせ、鼻をほじくりながら、数時間じつとしていられるほどの分別ぶりであった。太鼓や鉄砲に関心を持つことはいちどとしてなかったが、その代わり、紙を綴じてノートを作つてやると、この早熟の教養人は、びつくりする母親と叔母の見守るなか、ちっちゃな舌を見せながら、一日中数字を書き写していた。

つまりエウゼビオジーニョは家族のなかでも特別な人生を歩んでいたのである。裕福だったから、まずは法学士になり、その後は控訴院判事にでもなることは間違いなかった。サンタ・オラーヴィアにやってきたときも、叔母のアニカが食卓の吊りランプの下にその子を座らせ、巨大な豪華本の挿絵を鑑賞させていた。『世界の人々の風習』という本である。その晩もいつものように、赤と黒の格子縞に輝くタータンチェックのマントを軍服の肩章のようにたすきがけにしていた。さながらスチュワート家やウォルター・スコットの勇敢な騎士のような高貴な雰囲気を感じることがないよう、勇ましく弓なりに曲がった雄鶏の輝く羽根を挿した帽子はいちどとして脱がせなかった。その小さな暗い顔は回虫が多すぎるためにふにやふにやでバターののように黄色かったし、シチリアの農民や、山頂で銃に凭れたモンテネグロの恐ろしい戦士たちをまともに見すぎたためだろう、まつ毛のないその眼は、この年齢ですでに学問が消耗させてしまったかと思えるほど虚ろに青みがかった。これほど物悲しい気持ちにさせるものはこの世にふたつとしてなかった。

ご婦人がが腰掛けたソファの向かいにはもうひとり常連客がいた。威風堂々としたこの男は検事で、シルヴェイラ未亡人との結婚を密かに

目論み、五年前から計画を巡らしていたが、毎年新たにひとつずつ半ダースのシャツとブルターニュのリネンを買足してはシルヴェイラ家のリネン製品を肥やすだけで満足していた。ところが、この買物物がシルヴェイラ家の井戸端会議でネタになったことがあった。ペアの枕や広すぎるシャツ、一月を暖かく過ごすための厚い上掛け毛布など、ほかしてはいるけれども他にいかんとも取りようのないほめかしを聞いているうち、この司法官はみだらな気持ちになるどころか不安になった。

爾後、姿を見せるときの検事はきまって不安げだった。神聖な結婚の完遂のことを考えると、角を持って牛を捕まえるとか、ドウロ川の急流で泳ぐとか、そんな偉業を達成しなければならぬかのように思えて、身の毛がよだつのである。そこでもっともらしい理由をでっちあげ、検事は結婚を次の聖ミゲルの日に延期した。それでほっと一息。お茶やら教会のお祭りやら弔問やら、シルヴェイラ姉妹の行くところへ穏やかな気持ちでついて行けるのだった。黒服を着て、愛想よくなんやかやと気を配ってはドナ・エウジェーニアに微笑みかける検事は、もはや、父親として共同生活を送る以上の喜びを望んではいなかった。

アフォンソが居間に入るとすぐに嬉しくない知らせが届いた。司法区判事はいつもの痛みに襲われているらしく、夫婦ともども来られないというのである。またブランコ夫妻からも、兄マヌエルの十七回忌で、家族にとって悲しい日だから今日は残念だが失敬するという伝言がすでに届いていた。

「わかった、わかった。仕方なからう」とアフォンソは言った。「痛み、悲しみ、兄マヌエルだからな……四人オンブルをやるうじゃないか。どうです、ね検事先生？」

検事は眉を吊り上げてつるつるの額にしわを寄せ、小さな声で「ご希望とあらば」と言った。

「さあ仕事だ仕事だ！」教区司祭が手をこすりあわせながら大声で言った。気持ちはもうゲームにのめり込んでいるらしい。

一同は遊戯室に向かった。遊戯室は普段、ダマスク織りの緞帳で居間と仕切られているが、今はその緞帳が半ば引かれ、奥には緑のテーブルが覗いていた。ランブシェードの下に落ちた光の輪のなかにはトランプが扇状に広げられている。しばらくすると検事がにこにこしながら戻ってきて、「三人で心おきなくやっていただくために席を外しておりました」と言うのと、ドナ・エウジェーニアの隣に腰掛け、両手を腹の上に置いて、椅子の下で足を重ねた。ご婦人方の話題は判事の痛みだった。この三ヶ月は痛みの退くときがないそうよ。頑として医者にかからないですって、それがいけないのよね。弱るにつれて干からびて黄色くなっているって……妻のドナ・アウグスタときたら、好き放題食べて、ますます色艶が良くなっているっていうのに……ソファの隅で自らの肥満に埋もれ、胸のところで扇子を広げていた伯爵夫人が、スペインで似たような例を見たと話し始めた。夫の方は最後に骸骨みたいになってしまったわ。奥さんときたらまるで樽なのに。最初はその逆だったのよ。これを題材にした詩まであったくらい……

「体液ですな」と検事先生が憂愁を帯びた声で言った。

次いで話題はブランコ姉妹に及んだ。思い出すのはマヌエルの死。かわいそうに！若いさかりに。しかも非の打ち所ない美形で、どんなに賢明な青年だったことか！ドナ・アナ・シルヴェイラは亡きマヌエルの魂のために毎年ランブを灯し、主の祈りを三度唱えることを忘れなかった。一方、それをすっかり忘れていた伯爵夫人はすっかり悄気返っている。忘れずやると自から約束までしていたのに！

「人を遣って知らせてあげようかと思ったのよ」とドナ・アナは叫んだ。「ブランコ家はとっても感謝してくださったわ、あなた！」

「またチャンスはありますよ」と検事が指摘した。

かぎ針編みを片時も手放したことのないドナ・エウジェーニアは緩い編み目を作りながらため息混じりにつぶやいた。

「死に方もひとそれぞれなのね」

ふと静かになると、そこにソファの隅から別のため息が聞こえてきた。伯爵夫人のため息だった。貴族のウリーゴ・デ・ラ・シエーラを思い出したのだろう。つぶやいた。

「死に方もひとそれぞれなのね」

検事先生も、もの思わしげなそぶりで禿げ頭に手をやると、最後に同じ言葉をくり返す。

「死に方もひとそれぞれですな」

まどろみがあたりを重く領していた。

金箔をほどこした小テーブルの上では、背の高い蠟燭が悲しげな光を放っている。エウゼビオ・ジョーニョは『世界の人々の風習』の挿絵を注意深く器用に繰っていった。仕切りの緞帳の奥に垣間見える遊戯室からは、早くもいらいらし始めた教区司祭の声が聞こえてきた。こみ上げる恨みを押さえながら「パス。まったく今夜はこればかりだ！」とぶつぶつぶやいている。

ちょうどそのとき、婚約者のテレジーニャを引きずってカルロスが居間に駆け込んできた。遊んできたため、テレジーニャは興奮で顔が真っ赤だ。ふたりの大きな囁かしい声(かきこ)がまどろんでいたソファをたちまち目覚めさせる。

婚約者たちは楽しくも危険な旅から戻ってきたところだった。カルロスは自分の連れ合いに不服そうだった。酷い行動を取ったというのだ。ばくが郵便馬車を運転しようとしてたら、こいつ、運転席のほくの横に座ろうとするんだ。女は運転席に座っちゃいけないのにさ。

「でね、おばちゃん、この人ったらあたしのこと地面に放り出すよ！」

「まさか！ 嘘までつきやがつて！ ばくたち宿屋に着いたんだけどさ…こいつすぐ寝ようとするんだぜ。その前にやることがあるだろうって言ったのに…だって馬車から降りたらまずしなきゃいけないのは馬の世話でしょ！ 馬は汗びつしよりかいてるんだから！」

ドナ・アンナの厳しい声が割って入った。

「わかりました。わかりました。ばかな話はもうやめてちょうだい！ 馬遊びはもうじゅうぶんでしょ。テレザ、伯爵夫人の横にお座りなさい…飾り櫛に気をつけて…まあなんて格好かしら！」

十歳というデリケートな年頃の姪がこうしてカルロスと遊ぶのを目にするたびに、叔母は嫌な気持ちになる。公教要理も知らなければ思慮分別もないこの美しく向こう見ずな少年に、ドナ・アンナは恐怖心を抱いていた。しかも、独身女の想像力には、カルロスがああ娘になにか良からぬことをするのではないかとという考えが絶えず去来する。サンタ・オラヴィアに来る前に姪っ子を自宅に泊めてやるのだが、そのときには、カルロスと暗い隅にいたり服をさわらせたりしちゃだめときつく言い渡していた。少女は悩ましげな目つきで「わかったわ、おばちゃん」と言うのだが、いざ農園に着くと、たちまち自らの夫を嬉しそうに抱きしめるのだった。あたしたち結婚しているんだから、チュッチュしてれば子どもだってできるし、お店もって、その稼ぎで暮らしてゆくこともできるんじゃないかしら？ とところが一方の乱暴な少年ときたら、戦いのことや、ギャロプで四脚の椅子を飛び越えることや、ブラウンが教えてくれた野蠻な名前の土地に旅にでかけることや、そんなことばかりしか頭のなかになかった。テレザは胸の内を分かってもらえないことに気づくと、カルロスを「馬追い」呼ばわりした。カルロスはそれに

たいしてイギリス流の拳闘ポーズで脅しをかけ、最後にはいつも気まずくなって別れるのだった。

ところが、テレーザがいささかまじめな面持ちで伯爵夫人の脇に座って膝に手を置くと、カルロスがやってきてテレーザのそばでソファの背に半ば凭れかかるようにだらしなく座り、足をぶらぶらさせた。

「あなた、お行儀よくなさい」ドナ・アナは無愛想にぶつぶつ言った。

「ばく疲れた。四頭だての馬車を運転したから」カルロスはドナ・アナに眼もやらず横柄に切り返した。

ところが、突然飛び上がると、エウゼビオジーニョに飛びかかった。アフリカに連れて行って未開人と戦わせようというのだ。母親が息子を助けに来たときにはもう、カルロスはエウゼビオジーニョからタータンチェックの美しい騎士風マントを引き剥がそうとしていた。

「だめ、エウゼビオジーニョはだめ！ そんな無茶できる体じゃないんだから……カルリーニョ、注意してちょうだい。さもないとおじいちゃん呼ぶわよ！」

しかしエウゼビオジーニョはいっそう乱暴な襲撃を受け、ものすごい叫び声をあげて床を転げ回った。てんやわんやの大騒ぎになった。母親が声を震わせながら息子の許にしゃがみ込み、ひ弱な足で立たせると、ハンカチやキスで大粒の涙を拭ってやったが、その本人にしてからが今にも泣きだしそうだった。ぴっくり仰天した検事はスコットランド風の帽子を拾うと、雄鶏の羽根を物悲しそうな表情で撫でた。伯爵夫人は動悸がして息苦しいというように、その巨大な胸を両手で抱きしめている。それからエウゼビオジーニョはおばちゃんまの横にまるで貴重品のよう

に据え置かれた。この厳格な女性は瘦せた顔に憤怒の光を宿し、閉じた扇子を武器のようにしてカルリーニョを撥ねのける構えを見せていたが、一方のカルリーニョは後ろ手に組んでソファのまわりをぴよん

びよん跳ね、笑いながらエウゼビオジーニョに歯を剥いて吠えかかる。だが、ちょうどそのとき九時の鐘が鳴って、扉に背筋のピンとしたブラウンの姿が現れた。

ブラウンの姿を見るなり、走ってカルロスは伯爵夫人の背後に隠れて叫んだ。

「まだすぐく早いよ、ブラウン。今日はパーティーの日なんだからまだ寝ないぞ！」

するとシルヴェイラ姉妹の鋭い叫び声にも恬としていたアフオンソ・ダ・マイアが、オンバー^⑧をしている隣室から言った。

「カルロス。おとなしくもうベッドに行きなさい」

「おじいちゃん。今日はパーティーの日だよ。ヴィラサもいるし！」アフオンソ・ダ・マイアはトランプを置くと無言で部屋を横切り、少年の腕を掴んで廊下に引きずって行こうとしたが、少年の方は板張りの床でかかとを踏ん張って抵抗し、必死に抗議した。

「だって今日はパーティーの日じゃない、おじいちゃん……意地悪……！」ヴィラサが怒るよ……おじいちゃん、ほくまだ眠くないよ！」

扉が閉まると耳に届く抗議の声も小さくなった。まもなくすると、厳しすぎる女たちがアフオンソを非難し始めた。まったくわけがわからないわ。おじいちゃんたら、あの子のするひどいことは平気ではっておいて、夜の楽しみにになると少しも許してあげないんだから……

「アフオンソ・ダ・マイアさん、なぜあの子に夜ふかしさせてあげないのかしら？」

「規律が大事なんだ。規律が」容赦のない青白い顔で部屋に入ってきたアフオンソはつぶやいた。

オンバーのテーブルにつくと、震える手でトランプを拾いながら繰り返す。

「規律が大事なんだ。子どもは夜になったら寝なきゃならん」

ドナ・アナ・シルヴェイラは助け舟を出してもらおうとヴィラサの方を向き――ヴィラサは検事が座っていた場所に座ってご婦人がたと雑談をしていた――アフォンソが「規律」と言うたびに唇にしわを寄せて、例によって黙ったままにやりと笑った。

それから椅子の背もたれに凭れかかって扇子を広げると、皮肉たつぷりの口調で、きつとあたしの頭が悪いのね、その「規律」とやらのメリットがよくわからないもの、と言った。それってイギリス式でうかがっているけど、イギリスじゃあさぞかし良い結果を出しているんでしょうね。でも、あたしが誤解しているのかも。さなければサンタ・オラーヴィアがポルトガル王国にないとか。

嗅ぎタバコをつまみながらヴィラサがおずおずと頷いたので、利発な婦人はアフォンソに聞きとがめられないよう声を小さくして溜飲を下げた。ヴィラサは当然知らなかったが、カルリーニョにたいするこの教育方針はマイア家に集う友人たちから一度も賛同を受けたことがなかったのである。マイア家の家庭教師として異端のプロテスタント教徒であるブラウンを迎えていることからしてすでにレゼンデでは不愉快がられていた。かくも学識豊かでも敬意を一身に集めているクストーディオを教区司祭に迎えてからはとりわけそうだった。クストーディオは、子どもにアクロバットのコツを教えるのではなく、貴族としての教育を授け、コインブラ^⑨でうまくやってゆくための準備をしたかったのだ。

このとき、すきま風が入ってくるように感じた教区司祭が遊戯卓を立てて仕切りの綴帳を下ろしたので、アフォンソの耳にはもう届かないと思う、ドナ・アナが声量を上げた。

「ねえ、ヴィラサさん、クストーディオとしてはさぞおつらいことでしょうね。あの哀れなカルリーニョときたら公教要理の言葉をひとつと

して知らないんだから……マセド夫人の話を前々からぜひいちどお聞きいただきたいと思つてて」

ヴィラサはすでに知っていた。

「もうご存知なの？ 伯爵夫人、あなた覚えていらつしやる？ マセド夫人の話、痛悔の祈りの」

「ぞつとするわ！」とドナ・アナは続けた。「かわいそうに、あの方つたら、我が家に到着したときにはもう息も切れ切れだったのよ……それがあまりに強く印象に残っていたものだから。あのあと立て続けに三日も夢に見たわ……」

一瞬沈黙がよぎった。内気なヴィラサはどきまぎし、嗅ぎタバコのケースを指でいじり回しながらじつと絨毯を見つめている。ふたたび気だるい眠気が居間を領した。まぶたの重くなつたドナ・エウジェーニアは、ときおり思い出したようにふつくらとした手を動かして鉤針編みを編んでいる。ソファの隅に横たわつたカルロスの婚約者は、可愛い口を開け、美しい黒髪を首に垂らしてもう眠っていた。

ドナ・アナは小さなあくびをすると、自分の考えていることをふたたび口にした。

「あの子、間違いなく発達が遅れているわね。英語がちよつとできるけど、そのほかはなんにも知らないし……なんの取り柄もない」

「でも利発でいらつしやいますよ」

「かもね」と知的なシルヴェイラが無愛想に応じた。

そして、石膏像のように横でじつとしているエウゼビオジーニョの方に向いた。

「あんた、ヴィラサさんにここで、あんたが知ってるあのきれいな詩をお聞かせしたら……黙ってちゃだめよ、ほら……さ、エウゼビオジーニョ、いい子だから」

だが悲しそうな顔をしたこの臆病な少年はおばちゃまのスカートにしがみついたまま離れない。そこで叔母は少年を立て、脚力の弱い華奢な才人が倒れないように支えてやった。そして母親が、もし詩が朗読できたら今晚一緒に寝てあげるからと約束した。

この約束で少年は決心した。口を開けると、そこから、よだれで汚れた力ない朗読の声が流れ出した。締りの悪い蛇口から水がちよろちよろ漏れるようだ。

夜が来て、郷愁誘う辰星が

鈍色空のすきまから

ちらりと顔を見せはしても

やがて、麗しの顔ばせは

湿るベールに白く覆われ：

少年は詩を最後まで朗読した。直立不動で、手はぶらりと垂れ下がりが、曇った眼がおばちゃまにじつと注がれている。母親は鉤針編みの針で拍子を取っていた。伯爵夫人は疲れた微笑を浮かべていたが、単調なリズムに身を浸しているうちに少しづつまぶたを閉じていった。

「いやお見事、お見事！」ヴィラサは驚いて叫んだ。エウゼビオジーニヨは今や汗だくになっている。「なんたる記憶力！ 素晴らしい！……こうなるものはや奇跡ですよ……」

召使たちがお茶を持って入ってきた。トランプはすでに終わっていて、クストーディオがカップを手にとっている。みんなにこてんぱんにやられたことが悔しくてぶつくさばやいていた。

翌日は日曜で朝早くからミサがあるため、ご婦人がたは九時半にひきあげた。検事はいがしくドナ・エウジェーニアに腕を貸し、農園の

使用人がランプを持って前を照らす。シルヴェイラ家の召使いはエウゼビオジーニヨを庇護するように連れ帰ったが、毛布に包まれ、シヨールを首に巻いたエウゼビオジーニヨの姿はまるで黒っぽい柵のようだった。夜食のあと、ヴィラサはもうしばらくアフォンソ・ダ・マイアにつきあつた。アフォンソは、イギリス式の習慣で、寝室に戻るまえに書庫でコニヤックとソーダ水を楽しむことにしていたのである。

紫檀の古い書棚が質朴な品を添えているその部屋は、ぴたり閉じたカーテンと暖炉の残火、そして本で埋め尽くされたテーブルに静謐な光を投げかけているランプの火屋で、甘美な薄明のなか、生暖かい眠りをむさぼっていた。下からは、夜の静寂のなか、噴水の音が大きく聞こえてくる。

召使いがクリスタルガラスのグラスやソーダ水の瓶が載った低いテーブルをアフォンソの安楽椅子の方へ寄せているあいだ、ヴィラサは立つたままポケットに手をつ込み、真っ赤に燃えた薪が白い灰のなかで次第に消えようとしているところを、もの思わしげな眼で見ている。そしてふと頭を上げると、思いついたことでも呟くように言った。

「あの子は賢いですね……」

「だれのことだ？ エウゼビオジーニヨか？」暖炉のそばに腰を落ち着けると、嬉しそうにパイプに葉を詰めながらアフォンソは言った。

「わたしはあの子を見ているとぞっとするんだよ、ヴィラサ！ カルロスもあの子が好きじゃない。じつは、嫌な出来事があつてね……数ヶ月前のことなんだが。神興行列があつて、エウゼビオジーニヨは天使の格好をしたんだ……あのご立派なシルヴェイラス姉妹は天使の格好をしたあの子を伯爵夫人に見せたくて、かわいそうに、ここに連れてきてしまった。わたしたちもついうっかりしていて気づかなかつたんだが、待ち構えていたカルロスがエウゼビオジーニヨを襲つてな。屋根裏部屋に連れて

行つたんだ。そこでだ、ヴィラサ…あいつはエウゼビオジーニョを殺しかけた。天使は大嫌いだからと…だがとびきりひどいのはこの先だ。エウゼビオジーニョが泣き叫びながらおばちゃまの前に姿を現したんだよ。わたしたちがどんなにぞっとしたかわかるだろう。髪の毛はぼさぼさ。

天使の翼は片方がなくて、もう片方は糸の先にぶら下がってかかたとぶつかっている。薔薇の冠は首のところにまで深々とまっついて、金筋もチュールもスパンコールも、天使の服も上から下まですっかりぼろぼろになっている。けっきょく毛を笔入れ殴られた天使というところだ…わたしはカルロスをあやうく殺めるところだったよ…」

ソーダ水を半分飲むと、手を髭にやって、深い満足の表情を見せながら加えた。

「あいつは悪魔のように手に負えないんだ、ヴィラサ！」

椅子の端に腰掛けていた管理人は、唇にうっすらと微笑を浮かべると、膝のうえで手を組んでアフォンソを黙ったまま眺めていた。なにかを言い忘れたようなぼうっとした表情だ。唇を開こうとしてためらい、軽く咳払いをしてから、また暖炉の上をさまよう火の粉をもの思わしげに見つめた。

ところが火の方に足を伸ばしたアフォンソ・ダ・マイアは、シルヴェイラ家の子どもの話をまた蒸し返した。あいつはカルロスより三つ四つ歳上だが、ポルトガル式教育のために発育不良で蒼ちろい。あの年齢でまだ女中たちに添い寝をしてもらっているんだ。風邪をひくからと一度も体を洗ってもらっていないし、フランネルでぐるぐる巻きの重裝備なんだから！ 毎日毎日おばちゃまのスカートにへばりついて詩を暗唱したり、『信仰堅持の公教要理』を丸まる何ページも覚えたりしている。どんなもんかと思つて、ある日、このつまらない本を開いてみたよ。こんなことが書いてあった。「太陽は地球の周りを回っていて（ガリレ

オ以前だな）、毎朝、主が太陽にどこで動き、どこで止まるかご命じになっているのです」とかなんとか。これで学士さまの卵を育ててゐるんだから…

ヴィラサはまたにやりと笑った。それから、なにか思い出したように立ち上がり、指をパチンと鳴らして言った。

「そうだ、モンフォルト嬢が現れたことをご存知ですか？」

パイプの煙に包まれて、首も動かさず、ソファに凭れたままアフォンソは静かに尋ねた。

「リスボンに？」

「いや、パリです。アレンカール、物書きでアロイオスによく顔を出していた青年ですが、あのアレンカールが見たそうです」

そしてふたりは黙った。ふたりがマリア・モンフォルトの名を口にした当初、アフォンソ・ダ・マイアが抱いていた焦眉の関心は、マリアに奪われた孫娘を取り戻すことだった。だがその頃、マリアが大公とどこに雲隠れしたのか知る者はいなかった。公使の力を使っても、パリ、ロンドン、マドリードの秘密警察に湯水のような金を注いでも、当時のヴィラサ言うところの「野獣の巣穴」を発見することはできなかったのである。ふたりとも偽名を使っていたのだろう。しかも生来気ままなふたりのことだ。風の向くまま気の向くまま、今頃ひよっとするとアメリカやインドを、あるいはさらに辺鄙な地域を彷徨っているのかもしれない。その後、努力が実を結ばないことに少しづつ気力の萎えていったアフォンソ・ダ・マイアは、傍で美しく強く育つてゆく孫の世話にすっかり気を取られ、孫に優しい愛情を注ぐうち、モンフォルト嬢のことも、顔も名前も知らない遠くのはんやりした孫娘のことも忘れかけていた。ところが今になって突然、モンフォルト嬢がまたパリに姿を現したとい

うのである！　しかもかわいそうなペドロはすでに死に、廊下の突き当たりで眠っているあの子も母親を見たことさえない：

アフオンソは立ち上がると、頭を垂れ、書庫のなかを重い足取りで歩き回った。ヴィラサはテーブル近くのランプの下で、手帳から取り出した紙に一枚一枚目を通して見る。

「パリには例のイタリア人と一緒に？」部屋の奥の薄暗がりではアフオンソは尋ねた。

ヴィラサは手帳から顔を上げると言った。

「いや、金を出してくれる別の男と一緒にです」

アフオンソが黙ったままテーブルに近づいてきたので、ヴィラサは折りたたんだ紙を渡し、続けて言った。

「アフオンソ・ダ・マイアさん、これは大変重要なことですから、わたしとしても自分の記憶だけを頼りに申し上げてはいけないと思います、アレンカールにお願いしたところ、あの方はたいへん良い方で、私に話してくれたことを今度は手紙に書いてくださいました。というわけで、こちらが証書類になります。手紙に書かれている以上のことは私も存じあげません。ご自身でお読みになっていただければ……」

アフオンソは二枚の紙を広げた。それは単純な話だったが、『暁の声』の詩人であり、『エルヴィーレ』の名文家であるアレンカールは、お祭りの日に教会を飾るように花や金モールで文章を飾っていた。

ある晩、アレンカールが「黄金の家」を出ると、白いネクタイをしめたふたりの男と一緒にモンフォルテ嬢が四輪馬車から降りてきた。ふたりはすぐに相手がだれだかわかったが、舗道のガス灯の下で向かい合ったとき、お互いに一瞬ためらいがあった。意を決して微笑みかけたのはモンフォルテ嬢の方だった。アレンカールに手を差し出し、拙宅にいらっしやらないかと誘って、訪ねるべき住所と名前を教えた。名前は

ド・レストラード夫人だった。翌日の朝、モンフォルテ嬢は自らの閨房で身に起こったことを詳しく語った。タンクレードと、上京してきたパバを交えて、オーストリアのウィーンで三年間暮らしたという。パバはきつとアロイオスのときと同じようにサロンの隅に隠れ、娘の身繕いに金を注ぎ込み、かつて娘の夫にやったように今度は娘の愛人の肩をやさしくぼんぼんと叩いていたにちがいない。次いでモナコに移ったが、そこでは、アレンカールの地の文を借りれば「モンフォルテ嬢が垣間見た情念のはの暗いドラマ」が原因で、ナポリ人は決闘の末に死んだ。モンフォルテ嬢のパバもその年に亡くなったが、残されたのはほんの数百万レアルとウィーンの家財道具だけだった。娘の贅沢と旅、そしてタンクレードがバカラ賭博ですった金ですっかり落魄していたのである。モンフォルテ嬢はそれからしばらくロンドンに居たが、パリにやってくる、喧嘩好きの博徒ド・レストラード氏と暮らした。ところがこのド・レストラード氏はモンフォルテ嬢を荒廃させたあげくのはてに、ド・レストラードという名前だけ遺贈して捨ててしまった。もっと聞こえのよいマンデルヴィル伯爵という名前をもらえることになり、ド・レストラードという名前が必要なくなったからである。貧しく、美しく、無分別で、極端なこの女は結局、ある種の女性たちの暮らしに身を沈めることになった。アレンカールの言葉によれば「多くの人たちに愛されてきたがゆえにこれからも許されることになるであろう、蒼白のマルゲリット・ゴーチエ、つまり、あのしとやかなる椿姫をその最も美しい詩的象徴とする」女性たちの暮らしに倫落したのである。そして最後に詩人はこう締めくくっている。「あの女は今まだ輝くように美しい。でもやがては皺が寄ってくる。そのときあたりに見えるものは何だろうか？　自らの結婚花冠の血塗られて枯れ萎れた薔薇だ。ぼくは魂が引き裂かれるような思いで香水薫する閨房を後にしたよ、ヴィラサ！　脳裏

に去来するのは、月明かりを浴びて糸杉の根元に眠るあのかわいそうなペドロのことだ。この残酷な人生に失望したぼくは、いつときなりともすべてを忘れたくて、大通りに出てアブサンを飲みに行った」。

アフォンソ・ダ・マイアは手紙をぞんざいに放り投げた。話の破廉恥な内容よりも、凝りすぎた叙情的文章にうんざりしたのである。

そしてふたたび部屋のなかを行ったり来たりし始めたが、いつぼう、その手紙をいくども読み返し、文章の情感や文体や理想に感嘆の念を抱いていたヴィラサは、それを恭しく拾い上げた。

「孫娘のことは？」とアフォンソが訊いた。

「いや、存じ上げません。アレンカールもそのことは話題にしなかったと思います。どこに連れ行かれたのかさえ知りませんでした。リスボンに知る者はいないと思います。こんな大スキャンダルなのに、そこだけは話題になりませんでした。ただ私が想像するに、孫娘さんは亡くなっているのではないかと。でなければ：ちよつと私の推理におつきあいたしますが：もし娘が生きているなら、母親は相続財産における子どもの遺留分を要求してもおかしくありません：あの女は旦那さまがお持ちになっているものをよく知っています。懐具合がさびしいときもあつたはずですよ。ああいう女たちの暮らしにはよくあることですから：やれ娘の教育費だ、やれ食費だと、いまごろうるさく付きまとわれていたでしょう。あの女に遠慮なんかありませんからね。もしそれがないとすれば、娘は死んでいる。そうお考えになりませんか？」

「かもしれんな」とアフォンソは言った。

そして、指をポキポキ鳴らしながら消えた燵にふたたびじっと目を凝らしているヴィラサの前で立ち止まるところ言い足した。

「たぶんそうだろう：母も娘ともに死んだと思って、この話はもう止めにしよう」

真夜中の鐘が鳴り、ふたりの男は部屋に戻った。そしてヴィラサの滞在中、マリア・モンフォルテの名前は二度と発されることがなかった。だが、管理人がリスボンに発する前日、アフォンソが書齋に上がって、復活祭のプレゼントにカルロスがヴィラサの息子へ贈るサファイアのタイピンを手渡そうとしたときだった。ヴィラサが感激に口ごもりながらお礼の言葉を言うと、

「実はもうひとつあるんだ、ヴィラサ。ずっと考えていたことなんだが。従兄のノローニャな、アンドレ・ノローニャ、ご存知のようにパリに住んでいるんだが、あれに手紙を書こうと思つてな。あの女を捜し出して、娘を引き渡してくれる氣にしてくれたら一千万レイスイヤ、一千五百万レイスを出そうと：もちろん娘が生きていればの話だが。そこで、アレンカールから女の住所を聞き出してもらいたいんだ」

ネクタイピンの入った箱を旅行鞆の奥のシャツのあいだに入れようとしていたヴィラサはすぐに返事をしなかった。立ち上がると、アフォンソを前にして考え深そうに顎をさすった。

「なあ、どうだろうか、ヴィラサ」

「私はリスクが大きいと思います」

ヴィラサは理由を説明した。女の子は十三歳になっているはずだ。もう一人前の女で、氣質も性格も、おそらく習慣もすでにできあがっているだろう：ポルトガル語を話さないかもしれない。母親から引き離されればひどく寂しい気持ちにもなるだろうし：つまり、アフォンソ・ダ・マイアさんはよそ者をひとり家に迎え入れることになるわけでは：

「言うことはよくわかるよ、ヴィラサ。だが、母親は娼婦だ。それに娘はおれの血を引いている」

そのとき、廊下でおいちゃん呼んで叫んでいたカルロスが部屋の中に駆け込んできた。髪の毛が乱れ、顔は柘榴の実のように真っ赤だ。ブ

ラウンがちっちゃなメスのフクロウを見つけたんだ。おじいちゃんにも見に来てもらいたくてさ。家じゅう捜したんだから。見たら死ぬほど笑っちゃうよ……ちっちゃくて、ブサイクで、毛がなくて、それに大人みたいな眼してさ！ 巢のありかはわかってるんだ……

「急いで来てよ、おじいちゃん！ 急いで。巢に戻さなくちゃなんないんだから。だってそうしないとお母さんフクロウが悲しむでしょ……」
ブラウンがいまオリブオイルをやってるんだ。ヴィラサ、見に来てよ！ おじいちゃん、お願いだからさあ！ ほんとおかしな顔してるんだから。ねえ急いで。大人のフクロウにいないのがばれちゃうよ……」

祖父がのんびり微笑んだまま、母フクロウの不安にまったく頓着していないようにしびれを切らしたカルロスは、ドアをボタンと閉じて出て行ってしまった。

「なんとまあ心根のやさしい！」ヴィラサは感極まって言った。「フクロウの寂しい気持ちを思いやるなんて……あの子の母親ときたら、そんなほろりとくる気持ちなんかこれっぽちも持ち合わせていないというのに。つねづね申し上げているように、あれは野獣です」

アフオンソは悲しげに肩をそびやかした。もう廊下に出てからだった。アフフォンソが一瞬立ち止まって、声を潜めて言った。

「ヴィラサ。ひとつ言い忘れたことがあった。カルロスは父親が自殺したことを知っているんだ」

ヴィラサは驚いて目を見張った。嘘じゃない。ある朝、書庫に入ってきてこう言ったんだから。「おじいちゃん。パパはピストルで自殺したんだよ！」きつと召使いのだれかが話したんだろう。

「で、旦那さまは何て？」

「わしか？……どうしようもないだろう。そうだと答えたよ。わしはペドロに頼まれたことはなんでも守ってきた。託されたあの四・五行の走

り書きに書かれたことをな。サンタ・オラーヴィアに埋めて欲しいとあったから、ペドロはここに埋めた。母親が逃げたことを息子に知られなくなかったようだから、わしからは決して教えないつもりだ。アロイオスにあった二枚の肖像画を破壊してくれとあった。あんたも知ってのとおり、手に入れて破壊した。だが、父親の最期を隠すようには言われなかった。だからだ、あの子に本当のことを話したのは。狂気の発作に襲われてパパは自分の頭にピストルの弾を打ち込んだと……」

「それであの子は？」

「あの子は」と言ってアフオンソは微笑んだ。「パパはだれにピストルをもらったのかと訊いてきたよ。そして、ばくもピストルが欲しい欲しいと朝じゅうずっと駄々のこねっぱなしだった。で、ポルトから空気銃を一挺取り寄せた。秘密暴露の結末がこれさ……」

しかし、おじいちゃんを呼ぶカルロスの叫び声が下から聞こえてきたので、ふたりは急いでちびフクロウを見に行った。

ヴィラサは翌日リスボンに向けて発った。

それから二週間後、アフオンソは管理人から手紙をもらった。そこにはモンフォルテの住所とともに思いがけない事実が書かれていた。アレシカールの家を再訪すると、詩人は、ド・レストラード夫人を訪ねたさきに経験した新しい出来事をいろいろ話してくれたという。婦人の閨房には黒い眼、漆黒の髪、真珠色の肌の女の子の見事な肖像画が飾られていた。詩人はその絵に強い印象を受けた。イギリスの大画伯の筆によるという理由ばかりではない。まるで葬儀用の奉納画のような額縁の下には、白と紫の蜜蝋でできた美しい花冠が吊るされていたからである。閨房にそれ以外の絵はなかった。ロンドンで亡くなった娘の肖像画だという話だった。

《これで疑念はすべて晴れたと存じます》とヴィラサは付け加えてい

る。《かわいそうな天使は、今やもつと良い場所にいらつしやるわけです。あの子にとつて「はるかに良い」場所に！》

それでもアフォンソはアンドレ・ド・ノローニャに手紙を書いた。返事はなかなかこなかった。アンドレがド・レストラード婦人の住所を訪ねたとき、婦人はすでにドイツに発つた後だったのである。家財道具と馬は売り払っていた。アンドレが所属するクルブ・アンペリエルで、ド・レストラード夫人とパリの社交界に出入りする高級娼婦を知る友人の語るところによると、あの無分別な女は、シャンゼリゼのサーカス場、シルク・デイヴェールでアクロバットをやっているカタンニとかいう男と逃げたらしい。男は大手のアポロとでも言えそうな見事な体格をした美男子で、娼婦みんなで取り合っていたが、モンフォルト嬢が射止めたのだった。きつといまごろはサーカス団と一緒にドイツを転々としているに違いない。

うんざりしたアフォンソ・ダ・マイアはコメントをつけないまま手紙をヴィラサに転送した。誠実なヴィラサはこう返事をした。「旦那さまのおっしゃるとおりです。まったくひどい。これならふたりとも亡くなったと考えて、無駄な骨折りをしない方がよろしいかと……」そして追伸でこう付け足した。「間もなくポルトまで鉄道が開通するそうです。その晩には、もし旦那さまがよろしければ、息子と一緒に参ります。数日寄らせていただければ幸いに存じます」

この手紙がサンタ・オラーヴィアに届いたのは日曜日の夕食どきだった。アフォンソはこの追伸を大きな声で読んだ。人の善いヴィラサと農園でまもなく会えることをみんな喜び、ピクニックで川上まで大遠征しようという話まで出た。

ところが火曜日になるとマヌエル・ヴィラサから電報が届いた。父親がその朝、脳卒中で亡くなったという知らせだった。二日後には詳細を

知らせる長く悲しい手紙が届いた。昼食後のことだったらしい。とつぜん、息が苦しくてめまいがするとヴィラサが言った。そのときはまだベッドに行つてエーテルをいくぶん吸引するだけの余力があったが、食堂に戻ったときにはすでに千鳥足になっていて、すべてが黄色に見えると訴えると、うつ伏せで柵のようにソファに倒れ込んだ。いまわのきわになつても、ヴィラサの頭の中は三十年間管理してきた家のことでいっぱい、コルクの売却をあしろうこうしろともぐもぐ言ったが、息子にはもう聞き取れなかったという。大きく息を吐いたあと、もういちど眼を見開いて最後の吐息にのせて最後の言葉を發した。「旦那さまによろしく！」

アフォンソ・ダ・マイアは深い悲しみに打ちひしがれ、サンタ・オラーヴィアの召使いたちでさえ、ヴィラサの死を家人の喪のように感じていた。そんなある日の夕刻。老人が書庫で鬱いだまま、手にした新聞のことも忘れて眼を閉じていると、近くで紙に人の顔のいたずら書きをしていたカルロスが近づいてきて首に腕を回すと、アフォンソの頭の中を見抜くかのように、ヴィラサはもう農園に來ないのかと尋ねた。

「もう來ないんだよ。一度と会えないんだ」

少年は、老人の膝と腕のなかに収まったまま、絨毯をじつと見つめると、思い出したように悲しそうな声で言った。

「かわいそうに、ヴィラサ：指をばきばき鳴らしてたのに……おじいちゃん。ヴィラさんはどこに連れて行かれたの？」

「お墓だよ。地面の下だ」

するとカルロスは祖父の腕をゆつくりとすり抜け、真剣な顔で祖父をじつと見つめて言った。

「おじいちゃん！ 石だけでできたちっちゃな礼拝堂を作ったらどう？ パパのみたいに像があるやつ」

老人は孫を胸に抱きしめると、感極まって接吻をした。

「そのとおりだな。おまえはわしより優しいよ！」

こうして善良なヴィラはサブラゼレスに自分専用の墓石を持つことになった。ヴィラサのその慎ましやかな人生において、最も大それた望みがまさにこれだったのである。

さらに何年か、サンタ・オラーヴィアでは平穩に日々が過ぎた。

そして七月のある朝、アフォンソがコインブラで孫と投宿しているホテル・モンデゴの階段を（いまやマイア家の管理人となった）マヌエル・ヴィラサが昇り、真つ赤な顔で汗をかきかき大声で叫びながら居間に入ってきた。

「ネミニネ！ ネミニネ！ 全員一致の合格ですー！」

カルロスが初めての試験で合格したのだ！ それにしても何の試験だろう？ サンタ・オラーヴィアの旦那方に付き添ってやってきたティシェイラは、出入り口まで走って行くと、今や自分よりも背の高くなった青年をほとんど半泣きで抱きしめた。おろしたてのパティーナ⁽⁹⁾を着たその姿はとても美しかった。

上の部屋ではマヌエル・ヴィラサがまだ息を切らし、玉の汗を拭きながら叫んでいる。

「みんな驚いてましたよ、アフォンソ・ダ・マイアさん！ 先生方も感動なさっていらっしやいました。いやあ驚いた。なんたる才能でしょう！ 大物になるんじゃないかって、みんな口々に：でもどの学部にいられっしやるんでしたっけ？」

体を揺すりながら行ったり来たりしていたアフォンソは微笑みながら答えた。

「よく知らないんだ、ヴィラサ：われわれふたりはたぶん法学部に行

くんだと思うんだが」

気色満面のカルロスがドアのところに現れた。ティシェイラともうひとりで別の召使いが、盆にシャンパンをのせて後ろからついてくる。

「こっちへ来い、この劣等生」顔面蒼白のアフォンソは両手を広げて言った。「良い試験だったか、ん？……わしは：」

だが、この先が続けられなかった。次から次へと涙が溢れ、アフォンソの白い髭を伝っていった。

〈第四章に続く〉

(1) カルロスの愛称

(2) ポルトガルで鉄道が開通したのは一八五六年十月二十八日。リスボン―カレガード間の二十六キロであった。

(3) 北ポルトガル、ポルト上流のドウロ川流域にある都市。サンタ・オラーヴィアはこのレゼンデの近くに設定されている。

(4) プラトン中期の対話篇のひとつ。副題は「美について」。

(5) 共和政末期、帝政初期の古代ローマの歴史家。『ローマ建国史』を著した。

(6) ウェルギリウス作『牧歌』の冒頭

(7) スペイン起源のトランプゲーム

(8) トランプの一種

(9) ヨーロッパで最も古い大学のひとつであるコインブラ大学があり、ポルトガルの知の中心だった。

(10) リスボンの主要な墓所。

(11) Nemine。Nemine discrepante 「だれも反対票に入らなかった」

つまり「全会一致」の意)の省略形。
(12) ポルトガルの大学生が着る伝統的な服。カトリックの聖職者が着るスータンに似ている。